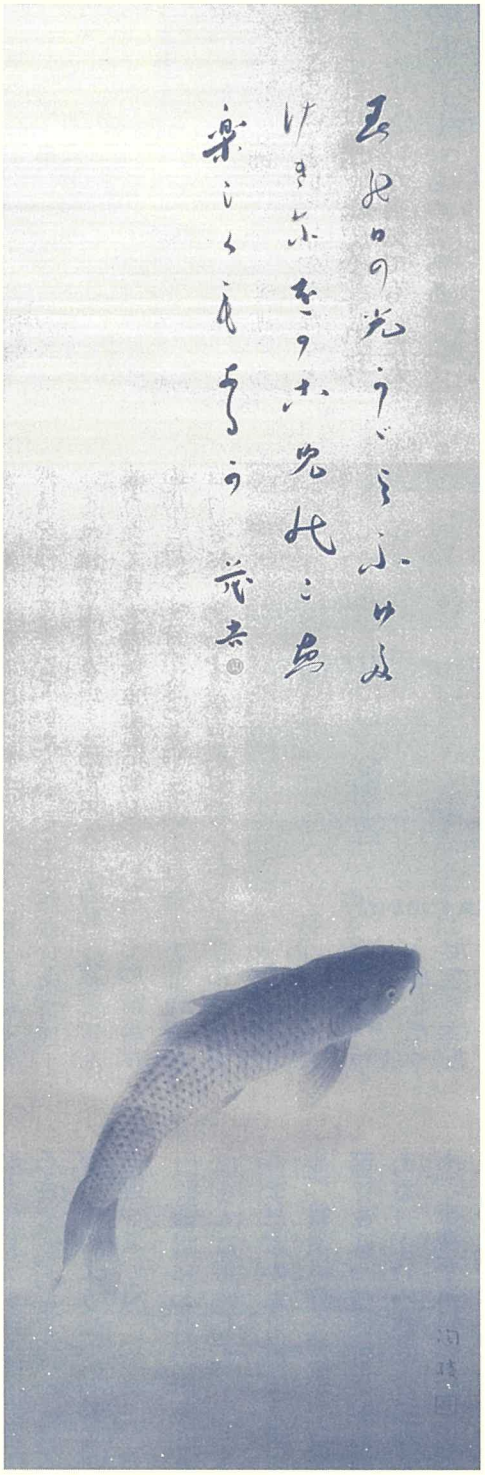
館報「茂吉記念館だより」第22号 □発行／令和2(2020)年2月15日
□発行人／秋葉四郎 □編集・発行／公益財団法人斎藤茂吉記念館

Vol.22 2020.2.15 茂吉記念館だより



斎藤茂吉・加藤淘綾画讃「春水鯉魚」

目次

・寄稿／小池光「『つきかげ』散歩」2-3
・寄稿／皆川二郎「茂吉と「群山」」4-5
・寄稿／香川哲三「茂吉と佐太郎 - 佐太郎の眼に映った茂吉」6-7
・館長随想「万葉の歌人旅人と憶良」8-9
・定例歌会概要「第15・16回」10
・特別イベント 対談トークショー 10
・収蔵資料から 11
・短信(掲示板) 利用案内 編集後記 12

寄稿

『つきかげ』散歩

小池 光

茂吉の十七冊の歌集は、どれをとってもわたしには親しいし、おもしろいが、わけても最後の『つきかげ』という歌集はおもしろい。

昭和二十二年十一月に大石田から東京に帰ってきて、昭和二十八年に数え七十二歳で逝去するまでの歌作で、山口茂吉が書いたあとがきによれば昭和二十三年、二十四年、二十五年までの作品については茂吉自身が編集清書してあった。二十六年以降はもうそういうことはできなくなり、門弟がさまざまな苦心をして既発表、未発表のものを集めて編集した。全部で九百七十四首で、歌集の発行は昭和二十九年の二月である。

わたしは『つきかげ』を愛読すること久しくて、むかし神田の古本街で求めたそれはもうぼろぼろになってしまい、書籍の体をなさないほど破壊されているのだけれど、いま久しぶりにそれを手に取って最初から読み直してみる。こんな歌がある。

人間は予感なしに病むことあり癒(なほ)れば楽しなほらねばこまる

一読、思わずくちびるの辺が緩くなるのを避けられない。「なほらねばこまる」という結句がなんともおかしいのである。それは誰でも病気をすれば、治りたい。風邪のようなささいな病気でも、だんだん快癒にむかうのはうれしいものである。こころ楽しいものである。では、治らなかったらどうか。ただ「こまる」のである。本当に、誰にとっても「こまる」のであり、嘘いつわりはどこにもないのであるが、この気の抜けたような（結句の八音字余りが重要）正直そのものの感慨が、実に人を食っている。この歌は何度か講演などで話すことがあったが、その都度聴衆の方々からは笑いがこぼれるのである。

税務署へ届けに行かむ道すがら馬に逢ひたりああ馬のかほ

同じく昭和二十三年の歌。こちらは有名になったから知る人も多いだろう。おそらく確定申告に茂吉自身が赴くところである。誰にとっても税金を納めることは愉快なことでない。止む無く納める。一円でも安く済むよう納める。そういう鬱屈した感情を抱えて歩いていたら、そこに馬がいた。

これは荷馬車を引く馬だろう。当時、東京でもまだたくさん荷馬車が活動していた。その荷馬車の馬と思わず目が合った。そののほほんとした馬の目付きに、思わず茂吉にはむらむらとするものがあったのであろう。こんちきしょうめ、という感じだったのではあるまいか。

遺歌集『つきかげ』

それがこういう歌になった。それにしても「ああ馬のかほ」という結句はべらぼうである。茂吉以外の誰がこういう結句で歌を収めると思うか。

前歌集『白き山』で、敗戦の悲傷を様式美の限りを尽くして歌い上げたあの歌人と、同じ人間の手になるものとは思われない。しかしそれが茂吉なのである。

われの背(せ)にゐるをさな児が吃逆(しゃくり)せり世の賢(かしこ)きもするがごとくに

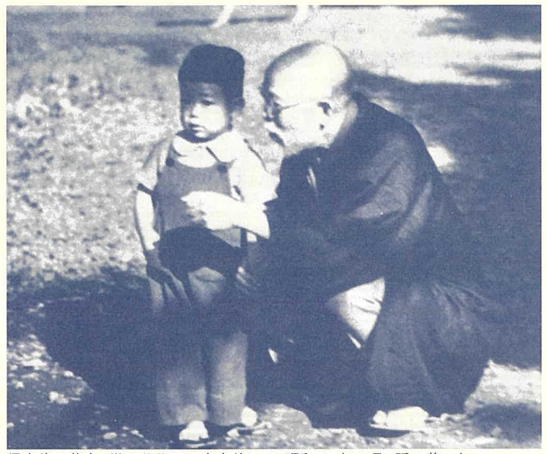
孫を年老いた祖父がおぶってあやしている。するとその子がしゃっくりした。賢い人もするように、というのであって、笑える。なぜならば、こう歌ったときわが孫はちっとも賢くない、と言っているに等しいからである。そこが茂吉の孫歌のおもしろさで、『つきかげ』には孫歌がたくさんあるけれど、このようにいわゆる世の孫歌とは一味も二味も違っている。

銭湯にわれの来るとき浴槽(ゆぶね)にて陰部をあらふ人は善からず

まだ家の風呂が使えず（おそらく燃料不足のため）銭湯に行く。すると湯船の中で手ぬぐいで「陰部」を洗っている者がおった。汚らしく、不快である。という感じ方になんのふしぎはないけれども、表現が実に激烈であって、わたしはむかし初めてこの歌を読んで爆笑したのだった。ここまでハッキリ言わずともよいのに茂吉ばかりは容赦しない。わたしはこの歌以外に「陰部」という語が短歌に出てくるのを見たことがない。

不可思議の面(おも)もちをしてわが孫はわが小便するをつくづくと見る

これも孫歌だが、臨場感まざれなく、おもしろい。たぶん立ち小便と思う。灰燼に帰した東京には至るところに空き地やバラックなどかおり、人はまだ平気で立ち小便をしていたのではなかろうか。孫と散歩していて尿意を催す。小便がかかるような近距離から、こどもは実にふしぎなことを見るようにわが行いを、見る。ある時期のこどもはよくこういうことをする。彼にとっては日常のすべてのことがふしぎで新鮮なのである。


帰京後の茂吉　世田谷代田の自宅前にて　昭和24年5月　孫の茂一と

俗にいふ睾丸(きんたま)火鉢もせずなりてはや三十年になりにけるはや

「睾丸火鉢」とは、寒さのあまり暖を取ろうと火鉢の縁に両足で乗り、股間を炭火で暖めるというあれだろう。行儀がいちじるしく悪いだけでなく、へたをすると火鉢そのものがひっくり返り、とてもあぶない。わたしも子供のころやってたびたび親に叱られた記憶がある。

この歌のふしぎなところは「三十年になりにけるはや」というところである。三十年前なら茂吉四十歳だ。茂吉は四十歳にもなって、まだ睾丸火鉢をすることがあったのだろうか。普通の大人がする行いとは思えないが、しかし、歌にはこう書いてある。

濃厚の関係にある面相に熱海の道をつれだち歩む

茂吉の面目躍如という感じの歌である。熱海温泉に旅行した。向こうから親しげに男女が歩いてきた。むくむくとジェラシーのこころが湧いてくる。おまえら、いい気になるなよ、貫一お宮のつもりか、というところである。誰にでも妬むという心情は避けがたくあり、茂吉が格別そうだったとは思わないが、ふつうの人は常々それを隠す。茂吉ばかりは隠さない。堂々と行く。それがこういう歌になって現前してくるのである。

それにしても「濃厚の関係にある面相」とはものすごい。この過剰さの中に斎藤茂吉という人がいる。

日本橋ひとり渡れどおのがじしほかの人らもわたりて居るも

これもむかし初めて読んで爆笑した。天下の日本橋である。いろいろな人が渡るの当たり前も当たり前、当たり前すぎるというところだ。それが当たり前でなく、ふしぎな光景として歌の中に詠まれる。ほかの人も渡っているというただそれだけの光景に茂吉がビックリしている感じがして、そこがおもしろい。

この歌は三句の「おのがじし」が絶妙にうまい。おのがじしという言葉を短歌の中に用いるならばこう使え、と言う手本を示された感がする。茂吉の歌集に接するとき、たびたび体験することである。

少し特異な歌ばかりについて印象を述べてきた。世に知られた名歌、名唱の類を引いて小文を終わる。

ここに来て狐を見るは楽しかり狐の香(か)こそ日本古代の香

目のまへの売犬(ばいけん)の小さきものどもよ生長(せいちやう)のちは賢(かしこ)くなれよ

円柱(えんちゆう)の下(した)ゆく僧侶まだ若くこれより先きいろいろの事があるらむ

暁(あかつき)の薄明(はくめい)に死をおもふことあり除外例なき死といへるもの

わが色欲いまだ微かに残るころ渋谷の駅にさしかかりけり

■こいけ　ひかる　歌人・仙台文学館館長

茂吉と「群山」

皆川 二郎

一、はじめに

新しい令和の時代になり、記念すべき「茂吉記念館だより」第二十二号が改元後最初の発刊として計画され、その原稿依頼を受領した。これまでに全国の有名歌人や地元山形県の先輩歌人の多くが、それぞれに茂吉に関する作品鑑賞や、茂吉論などを執筆されてきたが、原稿依頼に当たりどのように応えるべき苦心した。

東北アララギ会「群山」は、昭和二十一年七月二十日に七月号として「群山」第一巻第一号が発行された。以来、現在第七十五巻一月号（通巻八百七十三号）まで継続発行している。

この間、「群山」会員は、『扇畑忠雄著作集』全八巻、同『近代写実短歌考』、及び「群山」誌上に発表した各種の論説をはじめ、多くの先輩が発表している茂吉に関する評論や秀歌鑑賞などの文章に接してきた。また、子規以降の写実短歌を学ぶため、左千夫、節など七名及び「斎藤茂吉短歌合評」の連載、さらには、第五十三巻一月号からは、表紙Bに、「わが心のうた」と題して、会員の有志が作品を抄出しその解説をしている。現在も継続連載している。

その中には、当然のことながら茂吉に関する作品が含まれていることは言うまでもない。「群山」の会員がこれらの機会を得て茂吉に親しみ、茂吉を研究し、茂吉に学んできた。

「群山」創刊号

私は、この機会に、群山誌上に取り上げられた茂吉作品を拾い出し、その主なるものだけでも記し、この度の原稿依頼に応えることとした。

なお、文中氏名の敬称等は一切省略してある。

二、「群山」創刊時の茂吉の玉稿

私は、「群山」創刊時に茂吉の玉稿があったことを思い出し、第七四巻四月号の「自鳴鐘」というコーナーに「群山」創刊時の茂吉の玉稿」という小題を付して、創刊時の感激を新たにしたが、扇畑忠雄は、発刊の言葉として、「アララギ文化の地方的強化を計らむとしてここに東北アララギ会を結成し、歌誌「群山」（むらやま）を発刊して会員全体の真摯なる研究室たらしめると共に新しい文化運動を実践展開することとした。（中略）諸氏の熱意と協力とによって、アララギの生命をこの東北の地に燃え立たしめたい念願である。」と書いている。

この創刊号及び九月号にそれぞれ五首ずつの作品を寄せられた。また、この月の「編集所便」において次のように書いている。「今月号も斎藤茂吉先生土屋文明先生より玉稿をいただいた。くり返し拝誦し、その高到に触れていただきたい。両先生は、この「群山」のために種々お心づかひくだされ、また、斎藤先生より経営のことまでお案じいただいてゐるのは忝いきはみである。先生は現在山形県大石田にて御静養中であるが、健康の御回復の一日も早からむことを会員諸氏とともに祈念申し上げる。」と。

また、忠雄は、「茂吉との出会い」という文章の中で、「昭和六、八、九年の強烈な印象が茂吉追慕の原像となっていまでも色褪せることがない。」と書いているが、このことが、現在の「群山」につながっており、東北アララギ会として継続していることの証しであろう。

このように「群山」創刊当初において、茂吉の心遣いがあったことをいまさらながら改めて噛みしめている。この時の五首は、歌集『白き山』の小題「陸奥」に収められている。なお、一部訂正されて歌集に収められている作品を次に記す。

「陸奥」

東京をのがれ来たりて陸奥の友をおもへばあはれなつかし

うつり来てわれの生を抒べむとす鳥海山の見ゆるところに

少しづつ畳のうへを歩むことわれは楽しむ病癒ゆがに

もろごゑに鳴ける蛙を夜もすがら聞きつつ病の癒えむ日近し

みちのくに生れしわれは親しみぬ蔵王のやま鳥海のやま

続いて九月号には、小題「聴禽書屋」と題する五首を寄せられている。またこれも同歌集に、一部訂正の上収められている。

「聴禽書屋」

照りさかる夏の一日をほがらほがら鶯来鳴き楽しくもあるか

この庭にそびえたてる太き樹の桂さわだち雷鳴りはじむ

たたかひの歌をつくりて疲労せしこともありしがわれ何せむに

梅の実の色づきて落つるきのふけふ山ほととぎす声もせなくに

梟のこゑを夜ごとに聞きながら「聴禽書屋」にしばしば目ざむ

少なくても、「群山」と茂吉は創刊当初から深いつながりがあり、扇畑忠雄の指導の下に茂吉短歌に触れ、アララギ文化の東北での実践展開に大きくかかわってくることになる。

三、「茂吉作品合評」から

平成七年第五〇巻第六月号から三回にわたり茂吉作品合評を掲載している。当時有名アララギ派歌人の作品の中から作品を抄出し合評を実施していた。但し、文字数に限界があるため、焦点のみ端的に感想を記載する。

その一『赤光』（大正二年）から

①死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

②桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり

③のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

④灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり

⑤ほのぼのとおのれ光りてながれたる蛍を殺すわが道くらし

①平明で調べが良く、澄み透った夜気と蛙の声に癒されようとする心情。②結句に心の慟哭がある作者の技法を感じる。③写生即象徴ではない、甘美さがある。④母の骨ではなく、「母をひろへり」と、その重複に作者の意識がある。⑤蛍と詠っているが当時の左千夫の死が象徴的に感じられる。

これらの作品は、いずれも当時の声調の特徴を持ち、調べが平明であって澄み透っていることを指摘している。また茂吉の絶唱ともいうべき作品であり、作者独特の表現が今でも読者の心を離さない。

その二『白桃』（昭和九年）から

①人いとふ心となりて雪の峡流れて出づる水をむすびつ

②みちのくの山を蔽ひて降りみだる雪に遊ばむと来しわれならず

③上ノ山の町朝くれば銃に打たれし白き兎はつるされてあり

④いとけなかりし吾を思へばこの世なるものとしもなし雪は降りつつ

⑤弟と相むかひゐてものを言ふ互のこゑは父母のこゑ

①声調と相俟って孤独と寂寥の思いが沁みる。②上句の大きな形と下句の主観的表現が融合している。③主観の詠嘆を抑え、哀れみに対する感懐もある。④結句に当時の茂吉の心理的背景が感じられる。⑤結句に、深く自己を客観視した境地がある。これ等の作品は、当時の茂吉の背景が理解されればより深く鑑賞できるが、一首ずつでも十分である。

その三『つきかげ』（昭和二十三年）から

①みちのくの最上川べを住み棄てて嘆かむとして来しわれならず

②地下鉄の終点に来てひとりごつまぼろしは死せりこのまぼろし

③冬至より幾日過ぎたるころほひか孤独のねむり窓の薄明

④暁の薄明に死をおもふことあり除外例なき死といへるもの

⑤茫々としたるこころの中にゐてゆくへも知らぬ遠のこがらし

茂吉最後の歌集であり、大石田より帰京した昭和二十二年から同二十七年迄が収められている。

①気力体力ともに衰えの見える最晩年作であることが全体にうかがえる。②忠雄は「幻の死を独り言ち、生の深淵をのぞかせている作品。」と書いている。③「孤独のねむり」「窓の薄明」は斬新にて迫力がある。④身に及びつつある死の影を意識し、その様相の凝視と達観がある。⑤結句は、余韻を持ち、幽遠で無限の響きと共に言い難い虚しさが尾を引いている。

これらの三回の五首ずつの合評は、当時忠雄を中心に編集部において選定したと思われるが、いずれも我々の心から離れることはない。

なお、「わが心のうた」は、「群山」第五十三巻第一号から現在までに、二十六首の作品を抄出し、会員自らが、「心のうた」として解説しているが、本稿においては文字数から省略することとした。

中村憲吉葬儀の後　布野村にて　昭和９年５月８日
前列右から３人目扇畑忠雄、中列右から３人目岡麓・平福一郎、１人おいて斎藤茂吉・土屋文明、後列６人目近藤芳美

■みながわ じろう　歌人・「群山」

茂吉と佐太郎

―佐太郎の眼に映った茂吉―

香川　哲三

山口茂吉、柴生田稔、佐藤佐太郎などは何れも、斎藤茂吉に師事して業績を残した歌人である。中でも佐太郎は、早くから頭角を現し、茂吉はその力量を大いに評価していたのだった。茂吉門の先輩山口茂吉が、「佐太郎君は愛された門人」、と記した佐太郎の眼が捉えた茂吉の姿は、どのようなものだったのだろうか。

結論から言えば、佐太郎の遺した歌集・歌書、随聞記、折々に語った言葉などから立ち上がってくる茂吉像は、おおよそ歌人としての香気に満ちていると言って良い。人は誰しも、実生活を送る上で様々な側面を併せ持ちながら暮しており、茂吉の場合も例外ではなかった。だから、歌人茂吉を語った数多の文章の中には、私などから見れば、賛成し難い内容のものが混在するのである。茂吉の偉大さは究極のところ、成した短歌の比類ない響きにあり、歌人としての深い精神性にある、茂吉を語る者はそのことを決して忘れてはならない、そう思わせてやまないのが、佐太郎の綴った言葉である。

佐太郎の心眼は、若い頃より晩年に至るまで、一貫して歌人としての茂吉、その本質に迫っている。故に、佐太郎の言葉を通して結ばれる茂吉像には濁りが無い。二十五年余りの間茂吉の近くに居て、偉大な歌人の息吹を、もう一人の歌人佐太郎が、澄んだ瞳で見つめ記した世界は、おおよそ次のようなものであった。

岩波新書『茂吉秀歌』には三七〇首余の作品が取り上げられており、茂吉の作品を理解する上で欠くことのできない内容がちりばめられている。例えば「近よりてわれは目守(まも)らむ白玉の牡丹の花のその自在心(じざいしん)」の解釈など、他の追随を許さないものがあり、板垣家子夫の随行記を待つまでもなく、「自在心」の意味が明確に記されている。また「置きざりにして来りたるものありと思ひいづれば京の夢ひとつ」の文末に引かれている、「地下鉄の終点に来てひとりごつまぼろしは死せりこのまぼろし」にしても、浅草に抱いてきた幻は亡びてしまった（大戦により浅草は変わり果てていた）という意味だと簡潔に解説し、その理由を佐太郎は、門人達に詳しく語ってもいる。『茂吉秀歌』に於けるこうした例は枚挙にいとまが無い。実相を根本に置く写生短歌は、作者の作歌意図を正確に受け止めたときに真の光を放つ。作る場合も鑑賞する場合も、ごまかしの効かないのが写生である。佐太郎が茂吉について語った言葉は精緻であり、茂吉短歌の真髄を伝えている。

佐太郎の眼に映った茂吉像は、自身の短歌作品からもくきやかに浮かび上がってくる。佐太郎は十三冊の歌集に六五〇〇余首を残したが、茂吉に関する作品は、その内おおよそ五十首ほどあり、茂吉の境涯、作品の魅力などがこもごもに詠じられている。

かなしみの沁みとほるまで天地(あめつち)にわたらふまこと
歌ひたまへり

茂吉が還暦を迎えた際に献じた五首中の一首で、戦時の歌集『しろたへ』に収められている。哀感を帯びた骨太の言葉には、世の実相、自らの生、そのかなしみを、力の限り詠じた茂吉の姿を髣髴させる、深い言葉の響きがあるだろう。

先生はいまだ病みふしゐたまはん雪きえて梨の花
さくころか

第1回童馬会（斎藤茂吉全集編集刊行会）の折　昭和27年3月11日　神田末はつにて　前列左から結城哀草果・茂吉・輝子、中列左から佐藤佐太郎・山口茂吉・柴生田稔・土屋文明、後列左から斎藤茂太・小林勇・布川角左衛門

佐藤佐太郎『斎藤茂吉言行』

終戦を疎開先の金瓶でむかえた茂吉は、やがて大石田に移るが、そこで大患を患うことになる。敗戦後間もない昭和二十一年三月に佐太郎は、師の病を知らないままに大石田を訪ねて、「家なかは寒しとおもひ雪どけのしづくきこゆる君のへに居し」というしみじみとした作を成すのだが、先に挙げた一首は、帰京後に詠じている。茂吉に対する佐太郎の心情が滋味深く詠まれているが、作品の中核を成しているのは寧ろ、こうした佐太郎の詠嘆を誘った師茂吉の人間性、詩人質ではなかっただろうかと私は考えるのである。作品に漂う感傷は、師弟愛などありきたりの言葉では言い尽くされない二人の澄んだ交感を想わせる。

老人(おいびと)にいましたまへばかかる日暮(ひぐれ)話の声を絶えて眠らす
寒き風ふくみ苑(その)にて先生はあゆむ足よわくなりたまひつる

二首は共に、茂吉の体力が愈々衰えていった昭和二十五年の作である。山形から帰京した茂吉を、佐太郎は懸命に支え続けるのだが、一首目には、そうした師弟のとある一日の姿が静かに詠じられている。続く二首目は、十二月に入ったある日に、茂吉と新宿御苑を訪ねた際のものである。この時の様子は『斎藤茂吉言行』に詳しいが、そこで交わされた会話の肝心な部分は全て省かれている。その日、茂吉は佐太郎に対し、遺言にも似た大切な話をしたのであった。

風の吹くまともにむかひわがあゆみ御園の橋をわたりかねたる　斎藤茂吉『つきかげ』
よわりたる足をはげまし歩み来てわが友の肩に倚りゐたりけり　同

とにもかくにも、冬の一日の師弟二人の姿が、短歌を通し痛々しいまでに迫ってくるだろう。

健かにいましたまひて火のごとく言葉かがよひし頃をぞ思ふ

茂吉は昭和二十八年二月に七十二歳で逝った。掲載歌はこのとき佐太郎が詠じた挽歌七首中の一首である。壮んな頃の茂吉の烈々たる言葉の息吹を伝えて余すところがない。

翻って、茂吉が語った言葉、行動などは、門人の板垣家子夫、山口茂吉、佐藤佐太郎、田中隆尚らにより詳しく記録されている。筆致・内容等は、書き留めたそれぞれの思いを反映して特色があるが、佐太郎の場合に際立っているのは、茂吉の短歌、文学、芸術に対する言葉、息づかいを基本に据えて伝えているところにある。例えば『童馬山房随聞』は、青壮年期の佐太郎が、五十代の頃の茂吉の言行を書きとめたもので、茂吉の歯に衣きせぬ言葉が記されている。先に挙げた一首からは、そうした茂吉の壮んな頃の息吹が感じられ、同書にある次のような一節を思い浮かべてもいいのである。

・学問はじりじりやればいいが…歌は…それまで潜勢力をたくわえておいて一挙にやるんだからな。
・抒情詩というのは、こうとりすましたつめたいのはないよ。よかれあしかれ本心から出なくてはだめだ。
・子規の力量というものを僕らは認めるからね。…言葉なんかでもずばりずばりしてためらわないね。議論でもそうだ。

三体(さんたい)詩五百首を読み敢(あ)へていふ言葉重く金の如きは一首だに無し

箱根なる強羅公園にみとめたる菊科の花いはば無害先端技術

最後に佐太郎が、師茂吉の短歌を如何に高く評価していたかということを示す作品を挙げた。何れも最終歌集『黄月』に収められている。一首目は、佐太郎自らも述べているように、三体詩についての所懐を通しつつ、茂吉作品の響きの深さを思って成されたものである。二首目は、箱根強羅公園での作

大石のうへに草生ふるころとなり菊科の花が一つにほへる　斎藤茂吉『つきかげ』

の「菊科の花が一つにほへる」という把握・表現・味わいが、いわば無害先端技術と言ってよいものだと称揚しているのである。師を敬う佐太郎の心は、自身深遠な境地を開いた最晩年に至るまで、終始変わることがなかった。

■かがわ　てつぞう　歌人・「歩道」

館長随筆

万葉の歌人旅人と憶良

新元号の「令和」の出典が『万葉集』であることから、万葉ブームが起こって、関係する図書が書店に売れ切れたり、更に、今まで姿を消していた万葉関係書が、たちまち復刊されたりもしているらしい。われわれ短歌に深くかかわる者にとってはありがたいブームで、正岡子規、斎藤茂吉以来の万葉調短歌の復権もおのずから期待されるところである。

この機会に、私が平素心惹かれる万葉人の歌、大伴旅人と山上憶良の歌について少々触れておきたい。

一、「令和」の出典部分

『万葉集』巻第五に「梅花の歌三十二首序を并せたり」として出ている。次のようなものである。

天平二年正月十三日に、帥の老の宅に萃まりて、宴会を申ききき。○大宰府の帥、旅人（六十六歳）○開くこと時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、○よい月　○こころよく風は和らいで。　○梅は鏡の前の白粉のように白く咲いて。

蘭は珮後の香を薫ず。加之、曙の峰に雲移り、松は羅を掛けて蓋を○蘭はふくさの中の香のように薫っている。○松に煙霞がかかり、蓋を掛けたようだ。

傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封められて林に迷ふ。○山の穴（山の峰―新撰字鏡）に霧がかかる。○薄もの、ここでは霧。鳥が霧に閉じ込められている。

なかなか良い年号を選んでくれたものだと改めて思える。この序を書いたのが、大伴旅人説、山上憶良説、官人説などがあるが、旅人にも他の序「松浦川に遊ぶの序」が万葉集にあり、憶良は遣唐使で、漢詩の序を本場で学んでいるから、その可能性は甚大と言える。

旅人は大宰帥、「大宰府という九州地方を統括し、外交、軍事を担う重要な役所。帥はその長官」（永井路子著『よみがえる万葉人』）。対して憶良は「筑前守として九州にあった。今ならさしずめ福岡県知事」（前掲書）という関係である。二人は抒情詩短歌のみでなく時の高官としても、どうやら深交を結んでいたように思える。「梅花の歌三十二首」にも当然憶良も参加し、

春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮らさむ　818　筑前守山上大夫

という歌を作っている。梅花の宴の主人旅人が、赴任してから夫人を亡くしているから「梅の花独り見つつや春日暮らさむ」となる。旅人を慮る詩情である。旅人の歌はこの時

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも　822　主人　○空から雪が流れて来るのであろうか。

というもので、憶良の歌と比べると幾ばくインパクトが弱い感じがする。そのせいか、旅人には「後に追ひて梅の花に和へたる四首」がある。つまり「梅花の歌三十二首」に追加して作歌している。

残りたる雪にまじれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも　849

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ　852

などで、後出の歌はあるいは憶良の当日の作を意識しているようにも思える。

とにかく、およそ千三百年ほど前に、九州ブロックの高官たちが、大宰府の長官大伴旅人の招きで、梅花をテーマに歌会を開き、宴会で盛り上がっているのは思うだに楽しい。旅人は後に触れるように愛酒家だから、濁酒のような醸造酒を十分にふるまったであろう。先の永井路子は「飲んべエ大伴卿に乾杯」（前掲書）の中で西洋史の碩学木村尚三郎の説を紹介している、「ワインのような醸造酒は、人と人の心を結び、楽しさを倍加する酒、ウイスキーのような蒸留酒は人を孤独にする酒」だそうで、私は、長年、日本酒の吟醸酒で体感し、いわば人体実験を経ているようなものだから、

斎藤茂吉『万葉秀歌』上・下　茂吉は手製のブックカバーを施し、再販のために校正用とした

この説に全く同感で、おおらかな大伴旅人長官のふるまいも、あまり飲まず、そんな旅人を見守る憶良の姿も目に見えるようである。あるいは

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむぞ　337　山上臣憶良の宴を罷るの歌

などと言って宴席を離れたかもしれない。この歌は宴席を離れる儀礼歌という説もある。ここで憶良は伝家の宝刀を抜いた、などと空想するのも短歌の味わいである。旅人の梅花の宴は現在開いてもテレビ新聞に注目される大パーティだった。他の梅花の歌では伝不詳筑前介佐氏子首の歌が面白い。

万代に年は来経とも梅の花絶えることなく咲き渡るべし　830　○咲きつづけることであろう。

平明でシンプルなのがいいし、令和の時代を見通しているようではないか。現に（大宰府は特に）梅の花が絶えることなく咲き誇っている。

二、大宰帥大伴卿大伴旅人の歌―讃酒歌抄他

言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし　342　○何とも言いようもしようもなく。

なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ　343　○なかなかに―中途半端に　○願望

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る　344

この世にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にも我はなりなむ　348

一読酒の飲めない、嫌いな人は怒るかもしれないが、酒を売って商売している人や、私のような愛酒家は共感を禁じ得ない。特に「極まりて貴きものは酒」だといわれれば同感するが、しかし、酒壺になるのはごめんだ。来世が虫や鳥でよいとも思わないし、酒を飲まない人を「猿にかも似る」とも思わない。しかし、この一連を読むと大伴旅人がいかにも大人だと思わせる。こんなユーモアを湛えながら、人を接待したのかと思うと実に魅力的な上司ではあるまいか。旅人は現代人を魅了する優れた歌も多く作っている

都なる荒れたる家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし　440

我妹子が植ゑし梅の木見るごとに心むせつつ涙しながる　453

大宰府に同道した夫人を偲び、悼む歌は現代に通じ、身に沁む。旅人は任務が終わり、奈良に帰り、大納言として遇されるが、一年くらいで世を去っている。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり　793

旅人のこの歌は、その生涯を暗示して居るように想える。

三、山上臣憶良の歌数首

妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに　798

一説に、旅人夫人の死をわがこととして嘆いているという。二人のかかわりを見るとあり得るように思える。

銀も金も玉も何せむにまされる宝子に及かめやも　803

憶良と言えばやはりこの歌で、現代の幼児虐待事件を思うにつけて、思い出すし、学校教育に生かしてゆかなければならない短歌と思う。憶良は高齢で、子供を授かったか、やはり大人の響きを伝えている。

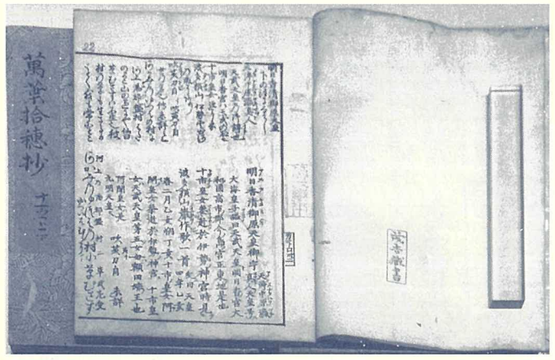
憶良の「沈痾自哀文」は万葉集の最も長い文章で、中国の名著から自在に引用して書いているのが特色である。生を貪り、死を畏れろ、人が死んだら生きている鼠に及ばないなどという発言は現代的と言える。それと関係する「山上臣憶良の痾に沈みし時の歌一首」は人の心を打つ。

士やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして　978

男児たるもの万代に語られる実績をあげずに世を去るの空しいことだ。と自らの病を嘆いた。

しかし、憶良は万世に語り継がれる短歌、長歌を残して何ともスケールの大きな万葉人である。

■秋葉　四郎（あきば　しろう）



『萬葉拾穂抄』冊子中に「茂吉蔵書」の印が押されている。茂吉は日本最古の歌集『万葉集』に惹かれ、万葉歌人の柿本人麿に強い関心を示し、研究に打ち込んでいる

参考図書
1.『萬葉集一　日本古典文学全集2』（小学館　昭和46年）
2.『萬葉集二　日本古典文学全集3』（小学館　昭和47年）

定例歌会 第15・16回

令和元年度講座事業として定例歌会（第十五回＝六月三十日、第十六回＝十一月十日）を、歌歴や居住地を限定しない超結社の歌会として実施した。参加者に対しては、事前投稿（一人一首）の短歌を無記名一覧化した資料を送付し、各参加者の互選により歌会当日に集計、その結果をもとに高得点作品五首を参加者より披講と感想、講師の歌評、それ以外の作品は講師のみの歌評を行った。以下、高得点作品と講師選作品を紹介。（敬称略）

第15回定例歌会　令和元年6月30日　館内集会室

第15回

＊互選一位／いつの間に小さくなりしか物干しに洗濯物を背伸びし干す　小関　和子

＊互選二位／ダウン症の娘もいつかは嫁ぐやと母親常に仕付け厳しき　蜂谷　弘

＊互選三位／叩くごと降りたる雨のあがる朝燕四羽巣立ちてゆけり　山川　ひろみ

＊互選四位／リハビリに耐へつ歩めば亡き夫の手のごとく風背を撫づるも　熊谷　瑶子

＊互選五位／旧日本兵撮りし戦地の写真展父が逝きたり野戦病院　鈴木　広

○秋葉四郎選／作場道何時しか立派に舗装されあの野仏は何処へ行きしか　青山　佐吉

第16回

＊互選一位／遥かなるいのちの襷あたたかし生後十日の孫を抱くとき　沼沢　修

＊互選二位（同点）／冬来れば遺品の上着身につけて父は子のにほい深く吸ひをり　沓澤　晋作

＊互選二位（同点）／芋を煮る主婦ら五人がはしやぎ居り山形訛りの煙が昇る　大場　正昭

＊互選二位（同点）／閑かなる御幸公園に仰ぎみる熊野の雪嶺夕陽に映ゆる　加藤　啓

＊互選五位（同点）／「敗戦の日本は必ず立ち直る」茂吉の熱弁十五歳で聞く　八鍬　キクヨ

＊互選五位（同点）／泥に埋もるる思ひ出の写真を洗ひゐる中学生の姿頼もし　水澤　タカ子

＊互選五位（同点）／通学班リーダーノッポが丁寧に立哨員にお辞儀して行く　青山　佐吉

○秋葉四郎選／昭和三十五年のわが結納金三万円と記されし目録箪笥より出づ　早坂　冨美子

＊特別イベント＊ 茂吉・輝子の孫二人 猛女斎藤輝子を語る 対談トークショー

特別展「茂吉の妻 斎藤輝子」苦難を越えて－世界一〇八ヵ国を巡った猛女－の開催に伴い、特別イベントとして、対談トークショー「茂吉・輝子の孫二人 猛女斎藤輝子を語る」を、令和元年十一月十日（日）、第十六回定例歌会終了後に開催した。

対談者は、茂吉と輝子の孫で、斎藤茂吉記念館大使を務める、斎藤茂一［父は茂吉の長男斎藤茂太］と斎藤由香［父は茂吉の次男斎藤宗吉（北杜夫）］の二氏。茂吉と輝子の夫婦多難のエピソードから、茂吉死去後の記憶にのこる輝子との生活、輝子の旅行にまつわる思い出を語った。

また、初公開となる斎藤家旧蔵フィルムよりデジタル化した家族と輝子の映像［昭和十一年十一月頃 国府津海岸（小田原）・箱根十国峠・羽田飛行場など］を、特別上映した。

対談トークショー　右から斎藤茂一　斎藤由香の2氏　令和元年11月10日　館内集会室

収蔵資料から

斎藤茂吉と義弟・斎藤西洋の交流を伝える書簡と旧蔵の品々が、令和元年度に西洋の遺族から寄贈された。その中に、西洋の長男・洋一の誕生を祝う茂吉と画家・加藤淘綾（とうりょう）の画讃がある。本稿では、これまであまり語られてこなかった茂吉と西洋の関係に触れながらで、この画讃を紹介したい。

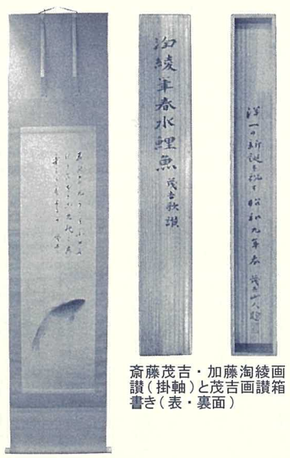
斎藤西洋は明治三十四年に斎藤紀一の実子・長男として生まれる。当時の茂吉は第一高等学校三部（医科コース）の入試に向け勉強中であった。元来、茂吉が山形を離れ東京の斎藤家に入ることとなったのは、紀一の経営する青山脳病院の後継ぎとなる男子に当時は恵まれず、養子となるためであった。一度落第したものの翌年に一高入学を果たすが、養父に実子・長男が誕生したことと入試に失敗したことの二つの出来事が、二十歳の茂吉に複雑な心情を抱かせたことは察するにあまりある。茂吉は一高在学中の明治三十七年末に正岡子規遺稿集『竹の里歌』を読み本格的に作歌を志し、翌年から新聞歌壇に投稿を始める。同年五月には親友・渡辺幸造へ「小生は医者で一生を終わらねばならぬ身」としながら、後に第一歌集『赤光』に収められる傑作の一つ「地獄極楽図」連作草稿を含む多くの短歌を記した書簡も送っているが、茂吉と西洋がともに「医者で一生を終わらねばならぬ身」として運命づけられた者同士であったことが、この義兄弟の関係を形作ったと言える。茂吉が西洋へ『家』の事などは決して心配するな。お前の第一の義務は『試験』のことだから、それに全力を尽すのは、第一の親孝行なのだ」と励ましの書簡を送っていることも、「家」によって生じた義兄弟の紐帯の強さを表している。その後、西洋は山形高等学校に進み、東北帝国大学医学部を卒業、医師免許取得後はともに病院の経営に携わることとなる。

さて、画讃についてであるが、茂吉による箱書き「淘綾筆春水鯉魚茂吉歌讃」「洋一の新誕を祝す　昭和九年春茂吉山人題」とある。西洋は昭和八年堀内淑子と結婚、翌年四月十三日、長男・洋一に恵まれ、茂吉はそれを祝して「春の日の光かがよふゆたけきにをのこ児のこゑ楽しくもあるか」という歌を贈った。歌集『白桃』にも詞書「祝斎藤洋一誕生」が添えられている。

この頃は、輝子の私行（ダンスホール事件）の報道がなされ、夫婦関係に亀裂が入り、茂吉は斎藤家を離れることも考え、西洋との関係も穏やかとは言い難い時分だった。報道後、茂吉は帰郷し、旅館を経営する実弟に「謹慎」と称し輝子を預けることを相談するのだが、その後帰京した二月二日の日記には「家二帰レバ児等踊リアガリテ喜ブ、本院ノ者等ハヒツソリトシテ一言モ云ワズ」と書き残している。その後、輝子とは十二年間の別居生活を送るが、西洋と茂吉は交流を欠かさなかった。昭和二十年に茂吉は西洋に家督を譲り、西洋が本家として青山脳病院を継ぎ、茂吉は分家となった。戦後、西洋は日本最初の小児精神病院となる東京都立梅ヶ丘病院の初代院長を勤め、昭和三十三年に享年五十七歳でこの世を去る。

絹地に描かれ、曙光を思わせるような柔らかい色合いの中、鯉が一匹。水面に顔を近づけ尾鰭を揺らめかせながら春水に佇んでいる。端午の節句間近ということも鯉のぼりを連想させ、男子の誕生を慶び、その成長を寿ぐ画讃といえる。画家で茂吉に師事したアララギ派の歌人でもあった加藤淘綾は、戦後の大石田町における茂吉に画材の提供と作画を教示するなど絵画創作に重要な役割をした存在だが、当時の茂吉との深い関係を示し、昭和九年の絵画作品としても意義深い一品である。

（文責＝五十嵐善隆）


斎藤茂吉・加藤淘綾画讃（掛軸）と茂吉画讃箱書き（表・裏面）

春の日の光かがよふゆたけきにをのこ児のこゑ楽しくもあるか茂吉（昭和9年4月）

短信（掲示板）

◆講座事業

◇特別講座「茂吉と万葉集」 講師＝梅内美華子氏（歌人・「かりん」編集委員）／関連する短歌作品を紹介しながら、茂吉の『万葉集』受容と柿本人麿研究についての講演／期日＝令和元年八月三日（土）／会場＝館内集会室／当日参加者数＝五十一人／事前申込制・無料（入館料別途）

◇定例歌会（第十五、十六回） 記念館の周知・誘客と短歌の普及と実作の向上、さらに歌壇の発展等を目的とした超結社の歌会形式で、継続事業として二回実施／第十五回＝令和元年六月三十日（日）・事前投稿歌数三十九首・参加者三十七人／第十六回＝令和元年十一月十日（日）・事前投稿歌数四十三首・参加者四十一人 ※詳細は本紙十ページに掲載

◆特別展・企画展示

◇特別展「斎藤茂吉と平福百穂」 日本画家で歌人の平福百穂と茂吉に焦点をあて、交された書簡、茂吉の歌集『赤光』『あらたま』の口絵をはじめ、画人として百穂が手掛けたアララギ叢書の装丁・挿絵、アララギ同人を描いたスケッチ、茂吉旧蔵の絵画作品を紹介／会期＝平成三十一年四月二十七日（土）から令和元年八月三十一日（土）／関連イベント＝館長ギャラリートーク［令和元年五月十七日（日）開催の第四十五回斎藤茂吉記念全国大会・館内見学行事の時間帯に実施］

◇特別展「茂吉の妻　斎藤輝子」苦難を越えて・世界108ヵ国を巡った猛女・ 欧州各地を巡った旅をはじめ、茂吉没後の南極旅行、エベレスト登山など、極地を含む世界各地を遊歴した猛女ぶりと、茂吉や家族との関わりを紹介／会期＝令和元年九月七日（土）から令和二年三月三十一日（火）／関連イベント＝対談トークショー「茂吉・輝子の孫二人　猛女斎藤輝子を語る」・館長ギャラリートーク［ともに令和元年十一月十日（日）］ ※詳細は本紙十ページに掲載

◇企画展示「創作折紙展　茂吉が詠んだ鳥」 茂吉が短歌に詠んだ「鳥」をモチーフにした折紙作品を展示／作品協力（制作・提供）＝宮永智悠氏（日本折紙学会会員）／会期＝令和元年七月十六日（火）から同年九月三十日（月）／関連イベント＝◎折紙講座「鳥のしおりを作ろう」講師＝宮永智悠氏（本展作品協力者）／企画展示「茂吉の詠んだ鳥」の折紙作品作者によるキツツキとカモをかたどった折紙の栞を制作するワークショップ形式の講座／会場＝館内集会室／当日参加者数＝二十二人／◎ミュージアムコンサート　演奏＝神谷明希氏（ピアノ）・宮永智悠氏（ホルン）［ともに令和元年八月三日（土）に事前申込制・無料（入館料別途）］

企画展示「創作折紙展　茂吉が詠んだ鳥」関連イベント折紙講座「鳥のしおりを作ろう」令和元年８月３日　館内集会室

◆訃報

大久保義彦氏（当館理事／斎藤茂吉文化賞受賞／山形市芸術文化協会会長／認定ＮＰＯ法人山形国際ドキュメンタリー映画祭理事長／父は山形市長・当館名誉館長大久保伝蔵）が令和元年十二月六日死去／八十四歳／葬儀・告別式＝十二月十四日山形県山形市鉄砲町のセレモニーホール山形（喪主＝長男大久保邦彦氏）

◆代表理事の退任と就任について

令和元年六月十八日、公益財団法人斎藤茂吉記念館代表理事を相馬健一氏が退任／清野伸昭理事が代表理事に就任

■編集後記

本紙二十二号のため、小池光・皆川二郎・香川哲三の三氏より玉稿を頂戴しました。諸氏のご協力に厚く御礼申しあげます。本年度は、例年にもまして人間・斎藤茂吉の研究の向上につながる多くの資料と作品の寄贈と寄託がありました。これは茂吉の遺族・親族など多くの関係各位のご好意によるもので、大変有難く思う次第です。興味深い資料の数々は、調査のうえ特別展などで順次公開して参りたく考えております。

（編集担当＝五十嵐）

■利用案内
□開館時間　9：00～17：00（入館受付16：45まで）
□休館日　毎週水曜日（祝日・休日の場合は翌日）
7月第2週の7日間・12月28日～翌年1月3日
□入館料　一般：大人600円・学生300円・小人100円
団体：大人500円・学生250円・小人50円
※学生：高・大学生　小人：小・中学生
※団体10名様以上 ※障がい者割引（団体料金適用）
□音声ガイド300円

■交通案内
□お車でお越しの方（※無料駐車場有：普通車70台／大型車5台）
・東北中央自動車かみのやま温泉I.C.から市内方面20分
□電車でお越しの方
・JR奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー10分
・JR奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩3分

館報茂吉記念館だより第22号　■発行／令和2年2月15日　■発行人／秋葉四郎　■編集・発行／公益財団法人斎藤茂吉記念館
〒999-3101　山形県上山市北町字弁天1421　tel.023-672-7227 fax.023-672-2626　URL https://www.mokichi.or.jp　■印刷／株式会社上山印刷